

ももいろのかっぱ ー遠野の昔話よりー

遠野ことば監修／阿部恒幸
文／寮美千子

文中の「ハ」は助詞ですが「ha」と発音します。

▼1

むかし あったずもな。

あついあつい なつのひのことです。
おもい にもつを どっさり はこんで
あせだくになった うまが
おとうさんと いっしょに かえってきました。

「おい たろさ

(おい たろう)

うまっこ ひやしき いってくれや」

(うまを ひやしに いってこないか)

「うん おどさん」

(はい おとうさん)

「ひとりで いげっか？」

(ひとりで いけるか?)

「あたりめえだ」

(あたりまえだよ)

「うまっこから め はなすんでねえぞ」

(うまから めを はなすんじゃないぞ)

「うん おらさ まかせどげ」

(うん おいらに まかせといて)

▼2

たろうが うまを ひいて いくと
となりの へいきちが うしろから はしってきました。

「たろさ どごさ いぐ？」

(たろうちゃん どこへいくの?)

「おら かわさ いぐ」

(おいらは かわに いく)

「おらも かわさ いぐんだ。

(おいらも かわに いくんだ)

いっしょに さがなつり すっぺや」

(いっしょに さかなつり しょうよ)

「んだども おらハ おどさんさ たのまれて

(だけど おいらは おとうさんに たのまれて)

うまっこ ひやしき いぐんだ」

(うまを ひやしに いくんだ)

「そっか。んでハ またな」

(そうか。それじゃあ、またね)

へいきちは つりぎおを かたに かついで

ぱあっと はしっていきました。

▼3

かわぎしには こんもりと きが しげり

こもればのなか すずしいかぜが ふいてきます。

たろうは うまを ひいて じゃぶじゃぶと

みずのなかに はいっていきました。

うまのからだを あらってやると

せなかから ゆげがたち しぶきが きらきら ひかります。

うまは きもちよさそうに はなを ならしました。

すると かわかみから たのしそうなこえが

きこえて きました。

「わあ でっけえ フナっこだ」

(わあ おおきな フナだ)

「そいつあ コイだっぺ」

(それは コイだろう)

どっと わらうこえがします。

▼4

たろうは とうとう がまんが できなくなり

「おらハ ちよっとばり みでくっから

(おいらは ちよっとだけ みてくるから)

こっから うごくんでねえぞ。

(ここから うごんじゃ ないぞ)

すぐ けっくつからな」

(すぐ かえってくるからな)

うまに そう いいふくめると

こざるのように すばやく はしっていったのです。

▼5

うまは ひとりぼっちに なってしまいました。

けれども おとなしくて りこうな うまでしたので

たろうの いいつけを まもって

かわのなかで じっとして いました。

すると うまのうしろで さざなみが たちました。

みずのなか なにかが ゆるゆる ちかづいてきます。

あねさまのベベのような きれいないろをしています。

▼6

みずから ぴよこん と かおを だしたのは

なんてことでしょう！ かつぱです。

ももいろの かつぱです。

かつぱは おさらから みずを したたせながら

あたりを そうっと みまわしました。

だあれも いないのを たしかめると ふっと わらい

いきなり うまのあしを ひっぱったのです。

▼7

おどろいた うまは うしろあしで たちあがりました。

かつぱは あわてて うまに しがみつきました。

うまは あしを すべらせ かわに はまって しまいました。

かつぱは ここぞとばかりに ちからをこめて ひっぱり

うまを おぼれさせようとしてました。

▼8

けれども うまのちからに かなうわけが ありません。

うまは もがいて たちあがり きしに かけのぼりました。

こんどは かつぱが びっくりする ばんです。
おもわず ぎゅっと うまに しがみつくと
うまは そのまま はしりだしました。

▼9

そのころ たろうは まだ みんなと あそんでいました。

ひが かたむきかけたころ たろうは やっと
フナを かたてに もどってきました。

ところが うまのすがたが みえません。

「あれ？ うまっこ どこさ いったべがな」

(あれ？ うまは どこに いったんだろう)

おーい おーい」

よべば いつでも すぐに とんでくる うまが

いくら よんでも やってきません。

あしおとも きこえません。

かわには うまが あしを すべらせた あとが ありました。

たろうは まっさおに なりました。

▼10

いそいで いえに もどると

むらびとが うまやの まえに あつまって

がやがやと さわいで いました。

たろうは おとなのあしの あいだから

そっと うまやを のぞいてみました。

うまは そこに いました。

ちゃんと ひとりで かえってきたのです。

ほっと いきをつく と あたまのうえから

ゴツンと げんこつが おちました。

「こらっ、たろう。うまっこ ほっぼらがして

(こら、たろう。うまを ほったらかして)

どこさ あそびさ いっただ！」

(どこに あそびに いった)

「おどさん、わるがった。これ」と

(おとうさん ごめんなさい。これ)

たろうは とってきたフナを さしだしました。

「さがなつりなんかさ むちゆうさなって

(さかなつりになんかに むちゆうになって)

おめえのせいで てえへんなことさ なってんだぞ」

(おめえのせいで たいへんなことに なっているんだぞ)

「えっ？」

▼11

「ほれ」といわれて みれば

うまのかいばを 入れる おおきなふねが

さかさまに ひっくりかえって います。

そこから ちいさな ももいろのが はみだして いました。

あわてて かくれようとした かつぱの てです。

みずかきのついた てが びくびく ふるえています。

「こりゃあ かつぱさ まづげえね」

(これは かつぱに まちがない)

「うまっこ おぼれさせっぺど すたな。わるごと ぼりすて」

(うまを おぼれさせようと したな。わるいこと ばかりして)

「こいつハ こどものあすも ひっばって おぼれさせんだぞ」

(こいつは こどものあしも ひっばって おぼれさせるんだぞ)

「ゆるせねえ。ころすてすまえ」

(ゆるせない。ころしてしまえ)

おとなたちは うまふねを えいっと ひっくりかえしました。

▼12

そこには ももいろのかつぱが いました。

あかんぼうのように ふっくらした かつぱです。

ちいさくなって ぶるぶる ふるえています。

たろうは かわいそうになって いいました。

「わるがったのハ おらだ。

(わるかったのは おいらだ)

おらハ うまっこ みねで あそびさ いって すまっただがら

(おいらが うまを みないで あそびに いって しまったから)

かつぱも わるいところを おごすたんだべ。

(かつぱも わるいところを おこしたんでしょう)

なんとか ゆるすてやって けんねべか」

(なんとか ゆるしてやって くれませんか)

たろうが いっしょうけんめい たのむので

おとなたちも しぶしぶ こういいました。

「おい かつば。もう にどと わるごとハすんねど。

(おい かつば。もう にどと わるいことを するんじゃないぞ)

やくそぐすっか。ほだらば けえしてやっぺ」

(やくそくするか。するなら かえしてやるぞ)

かつばは うん とうなずきました。

「そんだらば しょうもんハ かげ」

(それならば しょうもんを かけ)

▼13

おとうさんが ふでと かみを もってきました。

かつばは すらすらと ふでを すべらせましたが

だれにも よめない ふしぎな もじでした。

「これでハ やぐさ たたねんべ。ここさ てがたハ おせ」

(これじゃあ やくに たたない。ここに てがたを おせ)

おとうさんは かつばのてに すみを ぬると

ぺたっと しょうもんにおしつけました。

みずかきのある てがたが くっきりと つきました。

「ほんとに やくそぐ すんだな」

(ほんとうに やくそくするんだな)

かつばは なんども うなずきました。

それで やっと ゆるされて かわに かえして もらえました。

▼14

それからというもの かつばは むらのひとに えんりよして

やまのほうにある たきに すむようになりまして。

やくそくどおり うまやこどもにも いたづらを しません。

それでも ときどき むらが なつかしくなって

こっそり もどってくるのです。

ですから むらのひとは かつばのすきな きゅうりを えさに

かつばつりを します。

かつば つれるか つれないか。

どんどはれ。